

# 「継承語」の用語比較

## -韓国における用語使用の妥当性-

松浦恵子  
(釜山外国語大学)

- 1.はじめに
2. 「継承語」が意味するもの
3. 「継承語」以外の用語
  - 3.1. わたし語
  - 3.2. 繫生語
4. 韓国の現状
  - 4.1. 韓国で使用されている用語
  - 4.2. 継承語を学ぶ子ども達の属性
5. 考察
6. まとめと今後の課題

### 국문초록

행정안전부에서 발표한 2020년 통계에 따르면 한국에는 7,932명의 한일부부 자녀가 있고, 그 대부분은 한국의 일반 초중등 학교를 다닌다. 이러한 자녀들이 배우는 부모의 모국어인 일본어를 '계승어'라고 부른다. 본 연구는 '계승어'라는 용어가 한국에서 사용되고 있는 현황에 대한 타당성과 한국에서 발표된 논문에서 어떤 용어가 사용되고 있는지에 대한 조사를 실시하였다. 그리고 부산에서 활동하

www.kci.go.kr

는 주로 한일부부 학부모로 구성된 ‘부산일본마을’ 그룹을 중심으로 부모의 모국어인 일본어를 배우는 아이들의 속성 살펴보았다.

그 결과, ‘계승어’라는 용어가 한국의 실제와 맞지 않는 것이 밝혀졌다. 향후 부모의 모국어로써 일본어를 배우는 자녀들에 대한 추가적인 조사를 실시하고, 자녀에게 부모의 모국어로써의 일본어를 가르침으로 인한 어떤 인재로 육성될 지 논의가 필요하다. 그런 논의를 통해 한국에서 어떤 용어를 쓰는 것이 적당한지 모색하는 것이 중요하다.

**[주제어]** 繼承語、二重言語、日韓夫婦、多文化、複言語、繼承日本語グループ

## 1.はじめに

2020年の行政安全部の統計によると韓国には275,990人の外国人住民の子どもがおり、そのうち日韓夫婦の子どもは7,932人である。日韓夫婦の子ども達は、京畿道が最も多い2,349人、次にソウル特別市の1,582人、反対に最も少ないのは世宗特別自治市の45人で、残りは100人～500人程度が韓国各地に滞在している<sup>1)</sup>。韓国国内には日本人学校がソウルと釜山の2ヶ所にあるが、通っている子どもは学齢期(小学校～高校)の子どもの3.7%である。そのため韓国に滞在する子ども達の大部分は現地校に通い普段は韓国語を使っていると思われる。このような日本にルーツを持つ子ども達が親の母語や文化を学べる機会は、極めて限られており家庭が中心となっている(及川,2023)。

海外で育つ子ども達が、日本人の親の母語を受け継ぐことを議論する際、「継承語」という用語が使われることがある。しかし、文献を調べてみると似たような状況下で他の用語もいくつか使用されていることがわかる。

そのような中、韓国で現在使われている用語である「継承語」は、どの程度適切だと言えるのだろうか。本研究は、他の国々で使用されている用語が指し示すものを概観し、韓国で現在使用されている「継承語」や「継承語」以外

1) 行政安全部, [https://www.mois.go.kr/frt/bbs/type001/commonSelectBoardArticle.do;jsessionid=hAZYy6fTgwRw0dsmJmBf3xAs.node20?bbsId=BBSMSTR\\_000000000014&nttId=88648](https://www.mois.go.kr/frt/bbs/type001/commonSelectBoardArticle.do;jsessionid=hAZYy6fTgwRw0dsmJmBf3xAs.node20?bbsId=BBSMSTR_000000000014&nttId=88648) (2024年3月22日閲覧)

の用語を調査し、「継承語」という用語の韓国における妥当性を探ることを目的とする。

## 2. 「継承語」が意味するもの

「継承語」という用語は、アメリカをはじめカナダや日本、韓国、タイなど様々な国で使用されている。中島(2017)は、継承語(heritage language)とは親の母語、子どもにとっては親から継承する言語であり、継承語教育(heritage language education)とは親の母語を子に伝えるための教育支援であると述べると共に「継承語」という日本語はカナダ日本語教育振興会がheritage languageの和訳として使ったものである、と述べている。

マリア・ポリンスキー(Maria Polinsky)は、「習得の順番から言うと第一言語だが、その国の主要言語に移行したため(第一言語として)完全に習得しなかった言語」(Polinsky, 2008:p.149., 訳:近藤ブラウン(2019: pp.9-10.))と述べている。これは、例えば韓国在住の日韓夫婦の子どもの場合、生まれた頃から親と日本語で意思疎通することで第一言語として日本語を習得するが、韓国の幼稚園や小学校に行くようになり主要言語(韓国語)が日本語よりも優勢になる場合や、日本で生まれた日本人夫婦の子どもが親の都合等で海外移住し、現地校に通うことによって日本語よりも現地語が優勢になることを指す。

また、トムソン(2021)は「継承語」は主に北米の研究者がHeritage Languageの翻訳語として育ててきた言葉であるとし、「継承語」には受け継ぐという意味合いがあり、出自や血のつながりが示唆されるとしている。そして、日本語が第一言語であっても血統的に「日本人」ではない場合は、自分を「日本語継承語話者」とすると名乗るのは憚られると述べている。

このように「継承語」という用語は、海外で子どもを育てる親の母語を指し、子どもの立場から見ると親から受け継ぐ言語を意味すると同時に出自・血統を示唆する。また、第一言語として習得されたにも関わらず滞在国の主要言語の方が強くなったため、完全に習得されなかった言語を意味する。

日本語が母語である親を持ち韓国で育つ子ども達にとっての日本語は、こ

これらの先行研究のどれかに完全に当てはまるであろうか。韓国で現在使用されている用語「継承語」について、使われ方や意味するものを把握し、妥当でなければ適切な用語を模索することは、今後韓国で親の母語としての日本語を子ども達に教育していく際の方向性を決定することにも繋がるため、非常に意義があると考えられる。

### 3. 「継承語」以外の用語

中島(2017)では、「継承語」や「継承語教育」という用語が世界共通ではないことが触れられている。

「英国・豪州・ニュージーランドではコミュニティ言語 (community languages)、フランスやフランス系カナダでは「出身言語／出自言語 language d'origine)」、そのほか習得の順序との関係で primary language (第一言語)、使用の場を示す home language (家庭言語)、社会的立ち位置を示す minority language (マイノリティ言語)、immigrant/migrant language (移住者言語)、indigenous language (先住民／原住民言語)、ancestral language (先祖語)などさまざまである。」

そして、アジアについては以下のように述べられている。

「国によって事情は異なるが、圧倒的に優勢なのが「母語」である。日本でも同じであるが、このほかオールドカマーは「民族語」、ニューカマーには「母語」に加えて「母国語」「母語維持」「母語保持」「母語・継承語」等も用いられている。」(中島, 2017, p3)

このように、欧米ではコミュニティ・出身・習得順序・使用場所・社会的な立場等の観点から捉えた用語が使われてきた。そしてアジアでは、「民族語」を除けば「母語」に関連づけられた用語になっている。

本章では、中島(2017)で既に述べられている用語に加え、世界ではどのよ

うな用語が用いられているかを概観する。

### 3.1. わたし語

ヨーロッパでは複言語・複文化主義が唱えられCEFR(Common European Framework of Reference for Languages: 欧州共通参照枠)の基本概念となっている。言語については、ひとりの人間の中に母語や外国語、親や親戚とコミュニケーションするための言語等の複数の言語を取り入れ、相手や場面によって言語を使い分けて意思疎通をしようとすることに焦点が当てられている。

このような中、ドイツでは「チーム・もっとつなぐ」が毎日の生活の中で二つ以上のことばと文化に深いつながりを持つ子どもたちを「複言語キッズ」とし、複数の言語に日本語が加わることで「わたし語」が豊かになるとしている<sup>2)</sup>。「わたし語」について、奥村(2020)では以下のように述べられている。

「私たちは生まれてから母語、方言、集団語、外国語などさまざまなことばやそれに伴う文化に接しながら、自分独自のことばと文化を培っていきます。そうして培われたものは「わたし語・わたし文化」とも言うことができ、生涯にわたり絶え間なく変化し続けていきます。」

「わたし語」は、先述のコミュニティ・出身・習得順序・使用場所・社会的な立場から捉えた用語や民族語、母語とは異なり、母語や外国語等も含めたひとりの人間の中にある複数の言語に焦点を当てた用語である。

### 3.2. 繫生語

トムソン(2021)は、2020年に日本で閣議決定された日本語教育の推進に関する法律の基本方針に「海外在留邦人の子に対する日本語教育」という文言が

---

2) つなぐ <https://tsunagu.jp/f.go.jp/> 「チーム・つなぐ」は、5歳～10歳の複言語キッズの「ことば」と「ところ」の成長について家庭で取り組むことができる『わたし語ポートフォリオ』という記録帳も公開している。(2024年4月5日閲覧)

あり、在日朝鮮韓国人や在日中国人などは含まれないのではないかという疑問を持っている。また、「継承語」という漢字表記から前の世代からの承り、受け継ぐことばという意味合いがあり排他的だと言えると述べている。

そこで、オーストラリアの豪州繫生語研究会では繫生語を「けいしょうご」と読むとし、以下のように定義づけている。

「親から受け継ぐことばも含めて、親や家族、友だち、社会との繋がりから生まれ、さらなる繋がりを生み、そこで新しい意味を生みだし、その繋がりや次の世代に繋げていくことば」

また、繫生語は、3.1.の「わたし語」の一端を担うとも述べており、オーストラリアの子どもたちの「わたし語」には、「英語」がレパートリーの一つとして存在するとしている。そして繫生語・繫生語教育は「目指すのは一人ひとりの自己実現のための言語実践としての日本語」だと述べている。さらに、オーストラリアは多言語多文化社会であるため、複言語性が肯定的に受け入れられている場だとも述べている。

このように繫生語は、自分と身近な人々や社会との繋がり、未来へと繋げていくという意味合いを持つ用語であり、先述のコミュニティ・出身・習得順序・使用場所・社会的な立場から捉えた用語や民族語、母語とも異なる。

#### 4. 韓国の現状

本章では韓国で、親の母語としての日本語を学ぶ子どもや保護者を研究対象とした研究にはどのような用語が使用されているか、現状を述べる。そして、親の母語としての日本語を学ぶ子ども達の属性や学習目的についても言及する。

#### 4.1. 韓国で使用されている用語

小川(2010)は、日韓夫婦の子どもの言語環境と習得を調査した論文の中で「バイリンガル教育」や「日本語教育」という言葉を使用している。上野(2011)は、韓国在住の日韓夫婦を対象にアンケート調査を行ない、子どもの二言語併用の実態調査をしている。その中で親の母語としての日本語を「少数言語」と呼び、「言語の継承」という言葉も使用している。その後、櫻井(2013)は「継承語教育はHeritage Educationの訳で、韓国ではあまり馴染みがない」と述べている。また、同じく2013年に作られた韓国継承日本語教育研究会はホームページで「日本国外に出て、日本とのつながり、親子のつながりを強めるために学ぶ日本語」のことを「継承日本語」と呼び、外国語や母語の学びとは区別して捉えている<sup>3)</sup>と明記している。

櫻井(2013)以降、親の母語としての日本語を受け継ぐことに関する論文に「継承語」という用語の使用が少しずつ増えていく。それらの論文には「継承語」という用語の定義には触れず使用している論文もある。「継承語」の定義に触れている論文としては、岩間(2021)が中島(2005)は「親から受け継ぐことば」という意味で「継承語」を説明しているとし、「継承語」と呼ぶことで保護者や教育者の努力で意識的に継承しなければならない「ことば」ということを強調していることを挙げ、それに従い「継承語」という用語を使用すると述べている。そして、及川(2023)は、本稿の3章で述べたオーストラリアの「繫生語」やドイツの「わたし語」を踏まえた上で「継承語」を用いている。

韓国で使用されている用語は、この他に「二重言語」や「二重言語教育」がある。櫻井(2013)は、「二重言語」や「二重言語教育」はそれぞれbilingual, bilingual educationの訳で、第一言語と同時に第二言語の力も伸ばそうとする教育である。そして、バイリンガル教育では母語と外国語の両言語の育成が対象となるが、外国語では外国語のみが対象となる、と述べている。川本(2017)は、韓国の二重言語政策について、教育部の二重言語教育は学校内で外国出身の親を持つ生徒のみならず、韓国人生徒も含めた全ての生徒を対

3) 韓国継承日本語研究会, <http://krkeishougo.net/%e4%b8%bb%e6%97%a8> (2024年4月12日閲覧)

象とした多文化理解教育およびグローバル人材育成の一環として実施しているが、女性家族部は未就学児及び外国出身の母親と家族を対象とし、家庭内で外国出身の親が子どもに自然に母語を話し、育てる環境を形成することを目的にしていると述べている。そして、元(2018)は、韓国の二重言語教育政策についての論文で、二重言語教育(Bilingual education)とは、「二つの言語を巧みに駆使する人材の育成教育」、または「二つの言語を使用して教える教育」を意味する、と述べている。そして二重言語教育は、自身の根となる母語を維持することで肯定的な自我アイデンティティを育てていくことに目標を置いているという点で、その教育的な意味は大きいと述べている。

「二重言語」という用語が使われた論文では、上野(2011)が韓国在住の日韓夫婦で子どもがいる日本人の母親にアンケート調査を行なった結果、子ども達は「二重言語の環境」に置かれていると結論づけている。また、주현숙(2021)は韓国在住の日韓夫婦の子どもの日本人の母親にアンケート調査を行ない、その子女の「二重言語能力」の実態調査を行ない、「日本語継承」のためには幼児期からの日々の努力が重要であるとし、「二重言語」及び「継承」の両方の用語を使用している。上野(2011)および주현숙(2021)の使い方は、先述の女性家族部の「二重言語」の捉え方と一致する。その他、数多くの論文に「二重言語」という用語が使用されているが、韓国の言語政策について述べたものが多く見られる(高橋 2009, 花井 2010, 及川・田辺 2017, 川口 2018, 及川・岩間 2020等)。

以上のように、韓国では親の母語を受け継ぐことに関する研究論文では「バイリンガル教育」「日本語教育」「継承語」「言語の継承」「二重言語」等が使われている。しかし、「二重言語」については女性家族部の事業としての二重言語教育は親の母語を受け継ぐ意味合いがあるが、教育部の方は韓国人の生徒も対象としたより広い内容であり他とは異なる。

#### 4.2. 継承語を学ぶ子ども達の属性

前節では、韓国で親の母語として日本語を学ぶことについての研究論文で、どのような用語が使われるかを概観した。先行研究は、韓国在住の日韓夫婦

が対象のものが多く、韓国で親の母語として日本語を学ぶのは日韓夫婦の子ども達だけだろうか。

本節では、韓国の釜山で活動する「釜山日本村」というグループを例に挙げる。「釜山日本村」は、主に日韓夫婦の子ども達に日本語や日本文化を伝えることを目的に発足したグループで、2012年から本格的に活動をしており、筆者も立ち上げ当時から関わっている<sup>4)</sup>。この釜山日本村は、幼稚園と小学部で構成されており、活動の企画や実施は保護者が交代で担当している。活動内容は、幼稚園は日本の童謡や遊び、ダンス、絵本の読み聞かせや工作などで、小学部は領事館から無償配布される日本の国語の教科書を使ったり市販のドリルやプリントを使用したりして学習をしている。

釜山日本村で学ぶ子ども達は日韓夫婦の子どもが多いが、2012年から活動を続けている中で日本人夫婦の子どももいれば、在日韓国人と韓国人の子ども、日本人と韓国人以外の外国人との子ども、そして韓国人夫婦の子ども、日本からの帰国子女の子どもなど様々であった。日本人夫婦の子どもは、釜山の日本人学校には幼稚園がないため、そして韓国人夫婦の子どもは、仕事等の都合で日本で長年暮らし韓国に帰国した子ども(帰国子女)の日本語力維持のため、在日韓国人の子どもは日本で育った在日韓国人の親の母語が日本語なので、その言語を学ぶため、日本からの帰国子女の子どもは、親(帰国子女)の母語が日本語であるため、親の母語である日本語を学ぶために釜山日本村の活動に参加していた。

先行研究では韓国在住の日韓夫婦の子どもや保護者が研究の対象となっている論文が多く見られたが、釜山日本村の例をみると実際は日本人夫婦の子ども、韓国人と在日韓国人夫婦の子ども、日本人と外国人の子ども、日本からの帰国子女の子どもなど、何らかの形で日本にルーツがある子どもが親の母語としての日本語を家庭やグループ等で学んでいる。また、釜山日本村の例にはなかったが、この他にも在日韓国人と外国人夫婦の子どもが親(在日韓国人)の母語である日本語を学ぶという可能性も考えられ、日韓夫婦にとどまらない。

---

4) 釜山日本村は、釜山外国語大学の鄭起永研究室で発足したグループである。グループの詳細はホームページを参照されたい。(https://sites.google.com/view/busannihonmura/)

## 5. 考察

以上のように「継承語」という用語がどこで使われ始め、どの国や地域で主に使われ、どのような意味合いを持つのかを概観した。また、韓国語で既に発表されている論文に使用されている用語と意味するものについても現状を概観した。

既に使用されている用語と韓国の現状を照らし合わせてみると、〈表1〉のようになる。それぞれの言語が韓国の現状に合うかどうか、「○」「△」「×」の記号で表した。「○」は、合う、「△」は合うこともあるが合わないこともある、「×」は合わないことを表す。

〈表 1〉既に使用されている用語と韓国の現状

	用語	視点	韓国の現状に合うか
1	コミュニティ言語	1つの国や社会の中のコミュニティ	△
2	出自語／出身言語	出自・出身国	△
3	第一言語	習得の順番との関係	△
4	家庭言語	使用の場	△
5	マイノリティ言語	社会的立ち位置	△
6	移住者言語	移住してきた人	△
7	先住民・原住民言語	先住民・原住民	×
8	先祖語	言語のルーツ	×
9	母語	幼児期の最初の言語	△
10	民族語	民族	×
11	母国語	母国	×
12	わたし語	複言語	△
13	繫生語	繋がりを生み次世代に繋げていくことば	△
14	二重言語	2つの言語	△
15	継承語	出自・血統	△

1) コミュニティ言語

韓国における日本人や日本語母語話者に関するコミュニティは、日本人会や日本語教師の集まり、子どもに日本語や日本文化を教えるための団体など、数多くある。しかしその全てが親の母語としての日本語に関するコミュニティとは限らないため、完全に合うとは言い難い。

2) 出自語・出身言語

「出自」とは、「生まれ」や「出」を意味し、その人がどこから来たのかを示す。また、三輪(2023)によるとドイツにおける継承語教育に相応するのが「出自言語教育」であるという。「出身言語」は、藤原(2005)では、ドイツに来た出稼ぎ外国人労働者の出身国の言語・母語保持の意味で使われている。このように「生まれ」「出身国」に焦点を当てた用語の場合、親の母語としての日本語は日本から来た日本語母語話者には該当するであろうが、釜山日本村の例のように日本に長期滞在して韓国に完全帰国した韓国人夫婦や在日韓国人は当てはまらない。そのため、この用語も完全一致するとは言い難い。

3) 第一言語

「第一言語」とは、人間が生まれてから「最初に学ぶことば」や「一番得意なことば」であるが、日本語母語話者の親には当てはまるが、釜山日本村の例のように親が帰国子女の場合、最初に学んだ言語は日本語とは限らず、日本在住中は日本語が一番得意な言語であっても韓国に完全帰国後、それが変わってしまうこともあるため、この用語も完全一致するとは言い難い。

4) 家庭言語

韓国在住日韓夫婦の場合、家庭で使用される言語にはいくつかあり、日本語、韓国語、英語、その他(配偶者の母語)などである。そのため、ある家庭にとってはこの用語はしっかり来るものがあるだろうが、配偶者が日本語がわからない場合や意図的に日本語母語話者の親と子は日本語、韓国語母語話者の親と子は韓国語、家族全員揃う場では英語等という家庭もあるため、この用語も完全一致するとは言い難い。

#### 5) マイノリティ言語

この用語は、上野(2011)で「少数言語」という言い方で使用されている。韓国において日本語は、確かに少数派ではあるが、マイノリティ言語について議論が交される際、「消滅危機言語」「保全政策」等が話題に上ることがある。韓国で親の母語としての日本語を子どもに伝えていくことは、これらとは方向性が異なるため、一致しているとは言い難い。

#### 6) 移住者言語

「移住」とは、住んでいる地域から別の地域へ、住んでいる国から別の国へ移り住み生活拠点を移すことを言う。この場合、日本語母語話者が韓国に移住し、韓国で子育てをしながら子に親の母語である日本語を伝えていくと考えると、当てはまる。しかし、釜山日本村の例のように、韓国に移住してくるのは日本語母語話者のみではなく、韓国語が母語の韓国入夫婦の場合もある。そのため、この用語は完全に一致すると言い難い。

#### 7) 先住民・原住民言語

先住民・原住民とは、ある土地に元々住んでいた人たちのことを指し、先住民・原住民言語とはそのような人たちの言語を指す。韓国において、日本語母語話者は先住民・原住民には当てはまらないため、この用語は一致しない。

#### 8) 先祖語

先祖語は、欧米では「継承語」「コミュニティ言語」「家庭言語」とも呼ばれる。そのため、「コミュニティ言語」「家庭言語」が韓国の現状に完全に一致しないとなると、この「先祖語」も一致しないということになる(「継承語」については、15)を参照)。

#### 9) 母語

母語とは、幼児期に自然に習得する言語のことであるが、本研究は、親の母語として日本語を子どもが学ぶ際の用語についてである。日本語母語話者の親の言語として考えると当てはまるが、釜山日本村の例のように、親の母語が日

本語ではないこともあるため完全に一致するとは言い難い。またこの「母語」は、子どもの「母語保持」と使われることもあり、子どもが幼児期に習得した言語のことを指すが、本研究で言及している子どもの母語は日本語ではないこともあるため、これも完全に一致しているとは言い難い。

#### 10) 民族語

民族語とは民族、部族のことはや方言等を指すが、韓国の現状では民族や部族、方言等は特に関係がないように思われる。そのため、この用語は一致しないと考えられる。

#### 11) 母国語

母国語とは母国の言語であるが、日本国籍の親の場合は母国が日本であるため、日本語は母国語である。しかし、釜山日本村の例にもあるように、在日韓国人や日本からの帰国子女の母国は日本ではないため、これも完全に一致するとは言い難い。

#### 12) わたし語

わたし語の定義は、3.1.で述べた通りである。韓国で親の母語としての日本語を学ぶ子ども達が「複言語キッズ」であることは、同じである。しかし、その前提となっている基本概念「CEFR」の部分はどうか。法務省の統計によると、2019年～2023年の在留外国人の数は、〈表2〉の通りであり、2020年のCovid-19を境に減少し、2023年まで増加傾向にある<sup>5)</sup>。今後、韓国に住む外国人が増えると複言語・複文化という概念が取入れられる可能性はある。しかし、現状では多文化である。そのため、現状では前提や環境、背景の部分で一致しているとは言い難い。

---

5) 法務省 出入国統計, <https://www.moj.go.kr/moj/2412/subview.do> (2024年5月6日閲覧)

〈表 2〉韓国における在留外国人の推移

単位(人)

2019年	2020年	2021年	2022年	2023年
2,524,656	2,036,075	1,956,781	2,245,912	2,507,584

## 13) 繫生語

繫生語の定義は、3.2.の通り、繋がりを生み次世代に繋げていくことばであり、「わたし語」の一端を担うとしている。そして、多言語多文化社会であるため、複言語性が肯定的に受け入れられていると述べている。韓国にも多文化家庭という言葉があるが、これは韓国人と外国籍の夫婦の家庭のことを指し、意味合いが少し異なる。また、韓国では多言語や複言語は、現状ではオーストラリアほど馴染みがないと思われ、社会的な背景が異なるため、完全に一致するとは言い難い。

## 14) 二重言語

これは現在韓国で使用されている用語であり、一見現状に合っている用語のように見える。しかし、先述のように教育部の政策は韓国人生徒を含む全生徒を対象にしており、女性家族部の政策は未就学児及び外国出身の母親と家族が対象にしている。政策だけを見ると、女性家族部の政策が韓国の現状に合っていると思われる。しかし、親の母語としての日本語は未就学児だけでなく小学生や中学生も学んでいる。それも考慮すると、やはり完全に一致しているとは言い難い。

## 15) 継承語

親の母語としての日本語を子どもが学ぶ際、韓国で現在使用されているのが「継承語」である。そして「出自」や「血統」「受け継ぐ」という意味合いを持つ。釜山日本村の例を見ると親の母語としての日本語を学ぶのは、日韓夫婦の子どもだけではなく多様であることやトムソン(2021)からも考えると、「継承語」という用語は完全に一致するとは言い難い。

以上のように、15の用語が韓国の現状に一致するか、釜山日本村の例も挙げながら照らし合わせてみた。15の用語は〈表1〉のように、言語の側面から見た用語もあれば、言語のみならず文化や周りの人々、子どもの将来までも見通した用語もある。しかし、どれも完全に一致するとは言い難いものばかりであった。それは、使用されている国の事情や社会背景、文化背景が韓国とは異なるのはもちろんだが、親の母語である日本語を子どもが学ぶことで、どのような人材育成を目指すのかが現在のところ韓国では議論されておらず明確になっていないからではないかと思われる。韓国で親の母語として子ども達が日本語を学ぶのは、保護者で作るグループや家庭に委ねられている現状を踏まえ、以下のような事項を明らかにする必要がある。

- ① 日韓夫婦以外にどのような家庭で親の母語としての日本語を学ぶ子ども達がいるのか。
- ② 韓国在住の子ども達が親の母語として日本語を学ぶことで最終的に何をを目指すのか。

本研究の目的は韓国で現在使われている「継承語」という用語の妥当性を探ることである。結論として、「継承語」は妥当であるとは言い難い。「継承語」が出自、血のつながりを示唆するなら、韓国の継承語教育は他の用語を使うことを検討すべきではないだろうか。本研究で概観した15の用語は、言語のみに焦点を当てた用語が多く見られる。日本語が母語である親を持ち韓国で育つ子ども達は、日本語や韓国語といった言語だけを理解するに留まらず、日韓両国の文化や考え方、価値観も身につけることが期待される。そして、自身のルーツに関わる言語や文化を身につけることは、アイデンティティ形成の一助ともなるであろう。このように、子ども達が学ぶ親の母語としての日本語は、言語のみでなく周辺の要素も含んだ包括的なものである。「継承語」に代わる用語は、そこまで考慮した用語であるべきだろう。

## 6. まとめと今後の課題

本研究では、親の母語としての日本語を子どもが学ぶ際、韓国では「継承語」という用語が使用されることについて、世界ではどのような用語が使われているか、どんな意味合いを持つかを概観した。そして韓国国内で発表されている論文の中では、どのような用語が使用されているかについて述べ、世界で使用されている言語及び韓国で使用されている用語が韓国の現状と一致するか検討した。

その結果、どの用語も韓国の現状と完全一致するとは言い難く、「継承語」も「出自」や「血統」を意味するものとした場合、やはりこれも妥当とは言い難く韓国に合った用語の必要性が示唆された。また、釜山日本村の例にもあるように、韓国で親の母語としての日本語を学んでいるのは日韓夫婦の子どもだけではない。しかしながら、釜山日本村は、2020年度の韓国継承日本語研究会による全国調査で明らかになった40ある保護者で作るグループのうちの一つでしかないため、本研究の結果を一般化することはできない。今後は保護者で作るグループのさらなる詳細な調査に期待し、全体像を明らかにした上で親の母語としての日本語教育に関わっている人たちが集まり、どのような人材育成を目指すか議論を繰り返して韓国に合う用語を模索する必要があるだろう。その際、単に言語のみに焦点を当てた用語ではなく、文化や価値観なども考慮に入れた用語を造り出すべきである。そして、教育部や女性家族部のような韓国の関係部署や社会に提案していくのが今後の課題ではないかと考えられる。

## 参考文献

- 岩間晶子・及川ひろ絵(2021). 韓国の継承日本語教育活動の実態と支援課題 -自助グループの運営形態に関する考察をもとに-, 〈日語日文学研究〉116, 韓国日語日文学会 pp.121-146.

- 上野由香子(2011). 韓日国際結婚家庭における子供の二重言語併用の実態 -親の意識調査の分析を中心に-, 〈比較日本學〉25, 漢陽大学日本学国際比較研究所, pp.25-47.
- 及川ひろ絵(2023). 韓国における継承日本語教育の支援課題 -継承日本語自助グループ不参加の理由及び参加していたがやめた理由をもとに-, 〈日本語学研究〉75, 韓国日本語学会, pp.65-87.
- 及川ひろ絵・岩間晶子(2020). 韓国の継承日本語教育活動をめぐる実態 -母親たちによる自助グループに関する調査を中心に-, 〈日語日文学研究〉113, pp.189-215.
- 及川ひろ絵・田辺理子(2017). 多文化センターでの継承語及び文化活動実践報告 -韓国における継承日本語教育の方向性を探って-, 〈日本語学研究〉韓国日本語学会, 52, pp.33-52.
- 小川康子(2010). 国際結婚家庭の子供に対する日本語教育 -バイリンガル教育を中心に-, 〈日本語教育〉52, 韓国日本語教育学会, pp.19-32.
- 奥村三菜子(2020). 「欧州における継承日本語教育と欧州言語共通参照枠(CEFR)」近藤ブラウン妃美・坂本光代・西川朋美編 『親と子をつなぐ継承語教育 日本・外国にルーツを持つ子ども』くろしお出版, pp178-179.
- 川口慶子(2018). 韓国における継承日本語に関する研究, 崇実大学学校大学院博士学位論文.
- 川本綾(2017). 韓国における二重言語政策にかんする研究, 移民政策学会2017年度年次大会 抄録, <https://iminseisaku.org/top/conference/conf2017.html#conf2017winter> (2024年4月26日閲覧)
- 韓国継承日本語教育研究会 「韓国の継承日本語教育ネットワーク拡大のための基礎調査」国際交流基金ソウル日本文化センター提出報告書 2020年度版 pp.8-26, 41.
- 元真淑(2018). 韓国の二重言語教育政策の現況と課題: 二重言語講師制度を中心に, 〈関西都市学研究〉2, pp.40-46.
- 櫻井恵子(2013). 韓国における継承語教育の現状と課題, 〈第2回日本研究団体 国際学術大会第87回学術大会(韓国日本学会 第87回学術大会)〉, 予稿集 pp.436-441.
- 近藤ブラウン妃美・坂本光代・西川朋美 『親と子をつなぐ継承語教育 日本・外国にルーツを持つ子ども』(2020)くろしお出版 pp.175-189.
- 佐藤慎司・神吉宇一・奥野由紀子・三輪聖(2023) 『ことばの教育と平和』明石書店 pp.61-90.
- 高橋万里子(2009). 韓国における継承日本語・日本語文化教育の現状, 〈日本文化研究〉東アジア日本学会, 33, pp.137-162.
- トムソン木下千尋(2021). 「継承語教育」を問い直す,〈ジャーナル「移動する子どもたち」—ことばの教育を創発する—〉12, 移動する子どもフォーラム pp.2-3.
- 中島和子(2005). バイリンガル育成と二言語相互依存性, 〈第二言語としての日本語習得研究〉8, 凡人社 pp.135-166.
- \_\_\_\_\_ (2017). 継承語ベースのマルチリテラシー教育: 米国・カナダ・EUのこれ

- までの歩みと日本の現状, 〈母語・継承語・バイリンガル教育(MHB)研究〉 13,  
母語・継承語・バイリンガル教育(MHB)学会, pp.1-32.
- 花井理香(2010). 韓国の言語・教育政策と日本語の継承 -在韓日本人妻と韓日国際結婚  
家庭を中心として-, 〈言語政策〉 6, pp.19-30.
- 藤原三枝子(2005). ドイツ語を出身言語としない子どもたち: ベルリン州の教育現場  
の現状と言語政策, 〈言語と文化〉 9, pp.97-123.
- 三輪聖(2023). 複数の文化・言語の中を生きる子どもたちにとっての「日本語」の意味,  
佐藤慎司・神吉宇一・奥野由紀子・三輪聖編 『ことばの教育と平和 一争い・  
隔たり・不公平を乗り越えるための理論と実践』明石書店, pp.61-95.

## 필자 소개

성 명 마쯔우라 케이코  
소 속 부산외국어대학교 일본어융합학부 부교수  
주 소 부산광역시금정구금샘로 485번길 65 D685 우:46234  
전자우편 kmatsu21@bufs.ac.kr

## I Abstract

# Terminological Comparison of “Keishogo(Heritage Language)” - The Appropriateness of the Use of the Term in Korea -

Matsuura Keiko

(Busan University of Foreign Studies)

According to the statistics in 2020, 7,932 children of Japanese-Korean couples live in Korea. The Japanese language as the mother tongue of their parent(s) is called “Keishogo(Heritage language)”. The purpose of this study is to explore the validity of the term “Keishogo” which is used in Korea. Also, other terms used in the world and Korea are explored. Moreover, the Japanese-Korean couples’s children are not the only children learning “Keishogo” in Korea.

As a result, “Keishogo” is not very valid for the current situation since it contains pedigree. For further research, more details about the children should be explored and discuss the objectives of teaching “Keishogo”. Through further discussion, more appropriate term will be decided.

**|Key words|** Heritage Language, Dual language, Japanese-Korean couple, multicultural, Compound language, inherited Japanese group

투고일 2024. 06. 01 / 심사일 2024. 07. 08 / 게재확정일 2024. 07. 08